

せて」が、うまい。

用水にさわさわと水流れ初め気のそぞろなる早苗月
くる 大塚千代

父上が亡くなられて、田圃の仕事をはじめ慣れない農
作業を引き継いだ毎日に取材した一連中の作。大変そう
だが、はじめての体験が多いらしく、新鮮な気分が読み
とれて、読み応えのある一連に仕上がっている。「早苗
月」は旧暦五月。田圃に水を入れ、田植えをする月の意
味。この語は、藤原俊成の歌などにも出て来る古い語。
モンソーの園に小鳥の羽の散り血痕がしめす饗宴の

あと 石田郁男

有名なバリのモンソー公園である。なぜか一角に小鳥
の羽と血痕が散乱。大きな鳥か獣が、小鳥を襲って食い
散らかした跡らしい、というのだ。「饗宴のあと」とい
う表現が、小鳥を殺して楽しみながら食っただろう時間
をクローズアップして的確。

休む前は深呼吸三回、大切なひとの名前を五人^{称よ}
る 藤田紀美子

寝る前の習慣をうたった歌。毎晩寝る前に、自分にとつ
て大切な人、五人の名前を発音するのだという。この歌
を読んで、金子兜太さんの「立禪」を思い出した。

兜太さんと私との対談集『語る俳句・短歌』（藤原書店）
を出したことがある。二〇一〇年刊である。対談は秋の
長瀬の旅館で一泊二日で行った。俳人の黒田杏子さんの
司会。そこの話題の一つが「立禪」だった。

自分にとって大切だった人、好きだった人等の名前を

口に出して言う、と言っておられた。できるだけ朝、で
きるだけ立って発音することだった。立って唱える
から「立禪」。最初は二十人ほど。だんだん増えて二百
人近くになったと言っておられた。最初は菩提寺の先代
の和尚さん、二番目は俳句の先生である加藤楸邨。もち
ろん両親や亡くなられた皆子夫人も入っているとのこと
だった。じつさいのところ、五十人を越えたら無理だと
思うのだが……。

曇天の免許センター行列は雨季に生まれし者ばかり
なり 片山佳代子

運転免許更新のための行列だから、年代はそれぞれ
ながら、誕生日が近い人たちがかりのはずだ。「行列は
……」以下、その当然を再発見し、簡潔にかつ的確に言
葉化してみせた手腕。

むろの木の旅人の歌碑を遠見して我らは仙酔島へ船
出す 斎田眞希

広島県の鞆の浦観光の歌だが、大地名にはふれず、話
題をせまく小さく限定して不思議な味わいを出してい
る。カメラで言えばクローズアップの手法。「旅人」は
万葉集の歌人・大伴旅人である。

亡き友の生まれた日付名と共にパスワードにして偲
ぶよすがに 中根 猛

パスワードをどうして決めるか、さまざまなケースが
あるだろうが、亡き友人の誕生日というのは、はじめて
見た。友情という絆がそこはかとなく心に浮かんで波紋
を広げてゆく。